個別論文

穀倉地帯とプランテーションの港

——仏領期カンボジアにおける地方都市コムポン・チャームの発展

北川 香子
KITAGAWA Takako

一 はじめに

『カンボジアの農民（*Le paysan cambodgien*）』を著したジャン・デルヴェール（Jean Delvert）は、その序論で次のような見解を示している（Delvert 1961：31-32）。カンボジアでは、唯一農業だけが「真に国民的な活動」であり、「カンボジア人は農民」である。一方、都市の発達と都市におけるカンボジア人人口の増大は非常に新しい現象で、都市人口の大部分は外来者からなっている。[1] 従って、「カンボジア人を研究するとは、カンボジアの農民を研究することなのである」。確かに現在でも、カンボジアにおける都市人口の比率は小さい。一九九八年に実施されたセンサスによれば、カンボジア王国の総人口一一四三万七六五六人（National 1999：8）のうち、都市人口[2]は一五・七パーセントであると算定されている（*Ibid.*：25）。

都市が純粋にカンボジア的な存在ではないという判断を理由に、従来のカンボジア研究者は、都市を調査・分析の対象とすることが極めて少なかった。都市に言及する場合があったとしても、ほとんどが首都のプノム・ペン（*Phnom Penh*）に限られていた。その結果、プノム・ペン以外の地方都市に関しては、全く研究の手が及んでおらず、我々はほとんど情報を持ち合わせていない。

現在のカンボジア王国内に存在する都市の中では、首都のプノム・ペンだけが突出して大きい。その他の都市は、

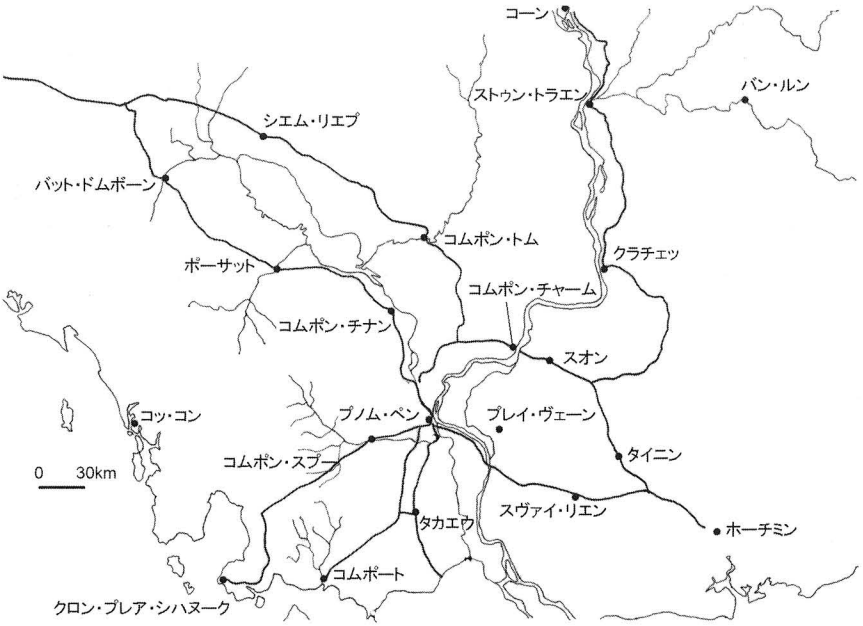

図1　カンボジア主要都市

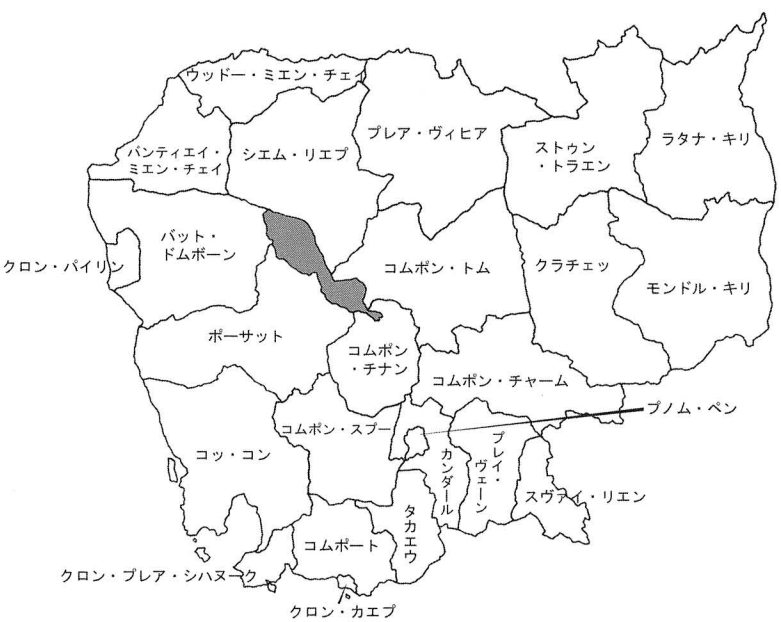

図2　カンボジア地方区分図

プノム・ペンに比べると格段に規模が小さくなるが、すべて地方行政単位カエト（*Khaet*）の中心地で、国内交通路網における要衝でもあり、必ず官庁地区と商業地区を備えている。今後、カンボジア王国政府による統治の実態、カンボジア王国内の経済活動などを理解しようとする上で、地方都市に関する認識の薄さは致命的な欠点となっていくであろう。カンボジアの現状および今後の可能性を考えるためには、個別の都市に関する実証的な研究を積み重ねていくことが必須である。

本稿では、カンボジア地方都市研究の手始めとして、メコン（*Mekong*）河中流域に位置するコムポン・チャーム（*Kampong Cham*）を取り上げる。まず第二節では、コムポン・チャームに限らずカエトの行政的中心地としての地方都市全体を概観し、第三―五節では、時系列に沿って、コムポン・チャームの町の発生過程を明らかにし、次に周辺地域とどのような関係性を構築してきたかを描出し、現在の地域的特性がいかに形成されてきたかを明らかにする。主史料はフランス国立文書館海外部門分館（Centre des Archives d'Outre-Mer　CAOM）が所蔵する、一八九八年二月―一九二九年前半までの『コムポン・チャーム理事官府定期報告書（*Rapports périodiques, économiques et politiques de la résidence de Kompong-Cham*）』である[3]（本文中では『月報』と記す）。これは仏領期のコムポン・チャームに関するほとんど唯一の史料である。内容は現地情勢一般、現地人官吏に関するコメント、公共事業の実施状況、裁判、収税結果、公教育、医療事業に関する報告などであり、定期報告書という性質から、時系列に沿った変化を追う上で有利である。ただしこの史料は、人口に関する情報を欠くという欠点を持ち、またコムポン・チャームの都市域の拡大過程を解明する上で不可欠な地図も、現在の地図および航空写真の他は、『月報』に添付された一九二四年の地図しか発見できなかった。そこで本稿が分析の対象とするのは、主に現地情勢に関する報告内容となる。

二　地方統治単位の改編

現在のカンボジア王国は、二〇のカエト（地方）および四つのクロン[4]（*Krong* 特別市）に分割されている（National）。各カエトが冠する地名は、以下の三種類に分けることができる。

(1)仏領期以前の史料にまで遡ることができるもの――バット・ドムボーン（*Bat Dambang* バッタンバン）、コムポン・チナン（*Kampong Chhnang*）、コムポン・トム（*Kampong Thum*）、コムポート（*Kampot*）、コッ・コン（*Kaoh Kong*）、クラチェッ（*Kracheh*）、ポーサット（*Pousat*）、プレイ・ヴェーン（*Prey Veaeng*）、シエム・リエプ（*Siem Reab*）、ストゥン・トラエン（*Stueng Traeng*）。

(2)仏領期以前の史料に遡って存在を確認することができないもの――コムポン・チャーム（*Kampong Cham*）、コムポン・スプー（*Kampong Spueu*）、カンダール（*Kandal*）[5]、スヴァイ・リエン（*Svay Rieng*）、タカエウ（*Takeev* タケオ）。

(3)独立後新たに設置されたもの――ラタナ・キリ（*Rotanak Kiri*）、モンドル・キリ（*Mondol Kiri*）、ウッドー・ミエン・チェイ（*Otdar Mean Chey*）、プレア・ヴィヒア（*Preah Vihear*）、バンティエイ・ミエン・チェイ（*Banteay Mean Chey*）。

(1)のグループの中心地は、主に①トンレ・サープ（*Tonle Sap*）湖周辺、②タイ湾岸、③メコン河沿岸の交通の要衝に位置している。(2)のグループの中心地は、(1)とともに仏領期に理事官府（Résidence）が設置された地点であり、現在の国道上に位置している。(3)はヴェトナム、ラオス、タイとの国境地帯で、水陸の幹線からは外れた地域にある。

理事官府設置以前、少なくともアン・ドゥオン（*Ang Duong*）治世（一八四八―六〇年）まで遡ることができる地方統治制度では、全部で五二のスロック（*srok* 地方）が、①王（三九スロック）、②ウパヨリエチ[6]（*Obhayoréach*）（五スロック）、③ウパラーチ[7]（*Oparach*）（五スロック）、④王太后（三スロック）の四王族に分属していた。王に属するスロックのうち三三は、五つのデイ[8]（*dey*）というグループに分けられ、チャウヴィエ・トラハ（*Caovéa Tolha* 宰相）、ヨマリエチ（*Yomaréach* 司法）、クララーハオム（*Kralahom* 水軍・水運）、ヴェアン（*Véang* 王宮）、チャクレイ（*Cakrei* 陸軍・陸運）の五大臣によって分掌されていた。①チャウヴィエ・トラハのデイはスロック・コムポン・スヴァイ（*Kompong Svai*）、②ヨマリエチのデイはスロック・トレアン（*Treang*）、③クララーハオムのデイはスロック・バ・プノム（*Ba Phnom*）、④ヴェアンのデイはスロック・トボーン・クモム（*Thbong Khmum*）、⑤チャクレイのデイはスロック・ポーサットを筆頭として（Khin 1991：211-214）、王都ウドン（*Udong*）を中心とする放射状に配されていた。デイに属さない六スロックと、ウパヨリエチ、ウパラーチおよび王太后に属する一三スロックは、比較的王都に近い地理的範囲に分布し、畿内的な領域を形作っていた。

スロック・コムポン・スヴァイは、トンレ・サープ湖とメコン河の間に位置する。チャウファイ・スロック（*Chaoway Srok* 知事）の居所は、ストゥン・サエン（*Stueng Saen*）左岸のコムポン・トムであった。一八八〇年代初頭のパヴィー（Pavie）の観察によると、コムポン・トムには常設の市場がなく、ある程度の資本を持つ華人や現地人の商人もいなかった。季節的に、メコン河岸のストゥン・トラン（*Stung-trang*）から華人商人がやって

きて、北方で採れる雌黄（gomme-gutte）の取り引きを行っていた（Pavie 1884: 156）。スロック・ポーサットはトンレ・サープ湖南岸に位置する。パヴィーによれば、中心地ポーサットはストゥン・ポーサットの両岸に広がる一〇〇軒ほどの小屋で、やはり常設の市場はなく、何人かの華人商人が、季節的にカルダモンや米を取り引きするのみであった（*Ibid.*: 90）。トレアンはバサック（*Basak*）河西岸に位置するスロックで、チャウファイ・スロックの居所は、ヴィンテ運河北岸に位置するプレア・バート・チョアン・チュム（*Preah Bat Chêûng Chum*）という村であった（Aymonier 1900: 161）。カエト・バ・プノムは、プノム・ペンより下流のメコン東岸に位置する。チャウファイ・スロックの居所はプーム・トミエ・デチュー（*Phum Thommêa Dechou*）という村で、一九世紀末のエモニエ（Aymonier）の記述によれば、「みすぼらしい小屋の集合」に過ぎなかった（*Ibid.*: 233）。スロック・トボーン・クモムは、プノム・ペンより上流のメコン東岸に位置する。スロックの中で最大の村はスオン（*Suong*）であるが（*Ibid.*: 276）、その近隣にあったプーム・オーチュン（*Phum Archâûn*）という村が、チャウファイ・スロックの居所であったと考えられている（*Ibid.*: 280）。すなわち一九世紀後半における五デイの中心地では、大人口の集中が見られるわけでもなく、商業活動も季節的なものに限られていたということができる。

一八八四年六月一七日、コーチシナ総督（gouverneur de la Cochinchine）シャルル・トムソン（Charles Thomson）とノロドム（Norodom）王の間で結ばれた協定によって、カンボジア王国の行政、司法、財政、商業に大幅な変革が加えられることになった（第一条）。各地方の主邑（chefs-lieux de provinces）にはフランスの理事官（Résident）が配置され（第四条）、フランス人の理事官――カンボジア人の地方の長（chef de province cambodgien）――郡の長（chef d'arrondissement）――小郡の長（chef de canton）――村落当局（autorités communales）という、一連の地方行政組織が設定された（カンボジアの政治行政組織に関する取り決め第一八、二三、二四、二五、二六、三〇、三二条）（Organisation 1885: 215-218）。理事官が統治する管区（circonscription résidentielle）は最初、プノム・ペン、コムポート、ポーサット、コムポン・チナン、クラチェッ、コムポン・トム、バナム（*Banam*）、コムポン・チャームの八つが設置された（Leclère 1894: 197-199）。その後数度にわたる統廃合および新設があり、最終的にはコムポート、タカエウ、コムポン・スプー、カンダール、コムポン・チナン、ポーサット、バット・ドムボーン、コムポン・トム、ストゥン・トラエン、クラチェッ、コムポン・チャーム、プレイ・ヴェーン、スヴァイ・リエン、シエム・リエプの一四になった（Morizon 1931: 52）。

旧都ウドンは、フランスによる保護国化（一八六三年）

後、現在の首都プノム・ペンに遷都したことによって縮小し（Pavie 1884: 73）、現在では一農村に過ぎなくなっている。デイの中心地の中では、理事官府が設置されたコムポン・トムとポーサットのみが、現在も地方都市として存続している。

現在のカエト・コムポン・チャームを構成する一六のスロック郡[9]のうち[10]、仏領化以前から同名のものが存在するのは、チューン・プレイ（*Cheung Prey*）、コムポン・シエム（*Kampong Siem*）、カン・ミエス（*Kang Meas*）、コッ・ソタン（*Kaoh Soutin*）、スレイ・サントー（*Srei Santhor*）、ストゥン・トラン（*Stueng Trang*）、トボーン・クモムの七つである。うちカン・ミエスとコッ・ソタンを除く五つは、一六九三年編纂とされる法典『クラム・スロック（*Kram Srok*）』にすでに現れている。デイ制度の中では、(1)メコン西岸のチューン・プレイ、ストゥン・トラン、コムポン・シエムの三つがコムポン・スヴァイを筆頭とするデイに属し、(2)東岸のトボーン・クモムはそれ自身がデイの筆頭であり、(3)下流のカン・ミエス、コッ・ソタン、スレイ・サントーの三つは、いずれのデイにも属さない、畿内的な領域内に位置していた（Khin 1991: 211-214）。

コムポン・チャーム理事管区は、一八八四年の時点では、メコン両岸に位置するクローチ・チマー（*Krauchmar*）、トタン・トンガイ（*Tothang-Thngay*）、コムポン・チャーム（コムポン・チャーム＋ストゥン・トラン）、カン・ミエス（カン・ミエス＋チューン・プレイ）、コッ・ソタン（コッ・ソタン＋シットー・カンダール *Sitho-Kandal*）の五郡から構成される予定になっていた（Organisation 1885: 213）。当時まだ存在していなかった七スロック、すなわちバティエイ（*Batheay*）、チョムカー・ルー（*Chamcar Leu*）、ドムバエ（*Dambae*）、メモット（*Memot*）、オー・レアン・オゥ（*Ou Reang Ov*）、ポニェ・クラエク（*Ponhea Kraek*）、プレイ・チョー（*Prey Chhor*）は、すべて内陸に位置している。このことから、カエト・コムポン・チャームという領域の内実は、メコン河岸から内陸へという方向で充実していったと考えられる。

交通路から見た場合、現在のカエト・コムポン・チャームという地理的範囲では、次の二本の幹線が、コムポン・チャームの町で交差している。①国道六A、六号線（プノム・ペン―コムポン・チャーム）＋メコン河架橋＋国道七号線（トンレ・ベート〔*Tonle Bet*〕―クラエク〔*Kraek*〕[11]―スヌオル〔*Snuol*〕[12]―クラチェッ―ストゥン・トラエン―ラオス国境）と、②メコン河である。国道は、日本の援助によってメコン河架橋が完成したことにより、カンボジア一国にとどまらず、ベトナム南部とタイの東部を結びつける国際的な幹線に発展する可能性を持った。またコムポン・チャームの町より下流のメコン沿岸地域は、メコン河岸の道とフェリーによって、コムポン・チャームよりもむしろ

図3　コムポン・チャーム地方郡区分図

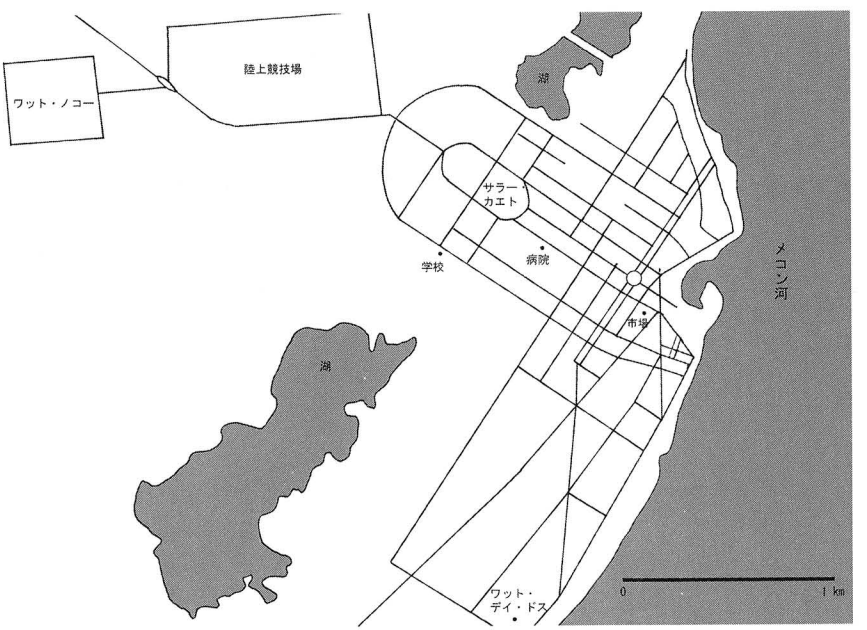

図4　コムポン・チャーム市内図

首都プノム・ペンに直接結びついている。

三　コムポン・チャームの出現と発展

一八六六年にメコン河航路探検を行ったド・ラグレ（de Lagrée）隊は、メコン河沿岸に位置する村々について、次のような記録を残している。

(1)クラチェッ（*Cratieh*）は四〇〇―五〇〇人が居住するカンボジア人の小村で、何の商業活動も見られなかった。家々は河岸の土手の最も高い部分に沿って細長く散らばり、果樹と庭園に囲まれていた。その背後の土地は急に低くなって、みすぼらしい水田が平原の中に点在していた（Garnier 1873: 160-161）。

(2)ソムボー（*Sombor*）はソムボック・ソムボー（*Sam-boc-Sombor*）知事の居所で、カンボジアの王権に服する知事の居所としては、最上流地点であった。蠟、シェラック、鹿皮といった森林産物が豊かで、内陸の「蛮族（tribus sauvages）」の地に続く道があった。「蛮族」の地は、奴隷の産地でもあった（*Ibid.*: 162-163）。

(3)ストゥン・トラエン（*Stung Treng*）には八〇〇人ほどの住民がいたが、全部ラオ人で、知事もラオ人であった。ストゥン・トラエンはセ・コン（*Se Cong*）川を通じてアタプゥ（*Attopeu*）に通じる商業中継地でもあり、コーチシナ経由で入ってきた何人かの福建人が商権を握っていた。彼らはアレカの実、絹布、綿布、砂糖、塩、小間物類、金物をストゥン・トラエンに運び、カルダモン、「中国のイラクサ[13]（ortie chinoise）」、蠟、漆、象牙、鹿・サイの角、孔雀の羽、籐・木製品をプノム・ペンに送っていた。同時にセ・コンは奴隷の産地に通じる道でもあった（*Ibid.*: 170-172）。

(4)ムアン・コーン（*Muong Khong*）のあるコーン（*Khong*）島には、八〇〇〇―一万人の住民がおり、交易が盛んで、商権は現地の女性と結婚した華人商人たちが独占し、東方の「蛮族」とも盛んに交流していた（*Ibid.*: 179-181）。

すなわちカンボジアが保護国化された当初、プノム・ペン―ラオス南部のメコン河沿岸地域では、ムアン・コーンが突出して大きな人口を持っていたが、他は千人に満たない集落しかなかった。森林産物を産出するのはソムボーよりも上流の地域で、カンボジア領内ではさほどの商業活動も見られなかった。コムポン・チャームはクラチェッとプノム・ペンのほぼ中間地点にあたるが、ド・ラグレ隊の記録には全く現れない。

管見の限りでは、コムポン・チャームという地名が記録に現れるのは、一八八〇年代に入ってからである。一八八一年の上メコン遡航記には、右岸にあるコムポン・チャーム（*Compong-Cham*）を出ると、航行が困難になるという

記述がある（Bonnaud 1881：446）。一八八四年の哨戒艇アルエット（Alouette）号の遡航記では、七月二九日の朝七時四五分にプノム・ペンを出航し、夕方の七時二七分にコムポン・チャームの停泊地に到着している。この記録には、コムポン・チャーム村の住民はマレー人であったと記されている（Campion 1884：505-508）。

アルエット号が寄港した翌一八八五年一月一日、コムポン・チャーム村に最初の理事官府が設置された。河岸の土手の上に仮の宿営が作られ、その脇にはクアン・サム（*Quan Sam*）率いる六五人のアンナム人（annamite）民兵（milice）のための兵営と、コムポン・チャーム―プノム・ペンを結ぶ電信局が置かれた。五月になって、宿営とは別の場所に、木造瓦葺の理事官府の建物が建設された。理事官府の西側には、森に向けて張出し型の防塁が作られた。最初に理事官府が設置された一八八五年には、カンボジア全土で反仏反乱が勃発した。一八八六年にはコムポン・チャーム村も標的となり、一月に五〇軒の家屋が焼かれた。四月にも一五軒が焼けた。反乱は八月になって終息したが、一八八七年一月から一八九七年一二月一七日まで、理事官府は一時中断された（L'administrateur 1907：80-85）。

理事官府が再開されると、翌一八九八年三月には河岸の整備が始まり、屋根つき市場の建設予定地が決定された。三、四月には新しく切り開かれた道々を住居が縁取り始め、六月には大勢の華人商人たちが、市場建設予定地の周囲に瓦葺のショップハウスを建設し始めた。一一月にも二〇軒ほどの瓦葺のショップハウスが建設されていた。さらに河岸に沿って、街灯が設置された[14]（一八九八年三月、四月、六月、一一月報）。一八九八年の一年間で、「河岸の整備や道路を通すために破壊されたものもあったにもかかわらず」、瓦葺のショップハウスの数がかなり増えた（一八九八年一二月報）。年末にはプノム・ペンから来たパン屋が開店し、コムポン・チャーム在住のヨーロッパ人の需要に応えるようになった（一八九八年一二月報、九九年二月報）。次の一八九九年にも、コムポン・チャームの町は日に日に拡大し、「魔法のように」ショップハウスの建造が進められて、藁小屋を駆逐していった。市場建設予定地の脇には、大きな商店の集中が始まった（一八九九年一月、四月、六月、一二月報）。二月には、理事官府が市場建設予定地での中国芝居の興行を許可し、大いに見物客を集めた（一八九九年二月報）。理事官府再開以来一九〇〇年までに、コムポン・チャームに来航する「華人の汽艇（chaloupe chinoise）」の数は倍増し、コムポン・チャームの他、コムポン・シエム、ピエム・チレアン（*Peam Chilèang*）、クローチ・チマー、チ・ハエ（*Chi-He*）の華人村も著しく拡大した（一九〇〇年一二月報）。

理事官府側では、衛生、商業の便宜、行政・商業中心地としての魅力といった観点からコムポン・チャーム村を改

良するために、公共事業を開始した（一八九八年五月報）。

一八九九年九月には屋根つき市場の建設請負業者が資材調達を始め、一一月には骨組みの建設が始まった。一九〇〇年三月に完成して公衆に開放された後は、夜の一時過ぎまで混雑を見せていた。同年八月にウパラーチ（*Obbar-ach*）がコムポン・チャームに滞在した際には、この市場が大祭典ホールになり、宮廷舞踊を見物するために群集が殺到した（一八九九年九月、一一月報、一九〇〇年三月、八月報）。

一八九八年五月にはコムポン・チャーム―ワット・ノコー（*Wat-Nokor*）間を短縮する道路の軌道が検討され始め、一二月には「古代の堤防」にぶつかる地点まで建設が進んだ（一五〇〇メートル長×六メートル幅）。九九年二月には、路上の岩石を爆破・除去する作業を除いて、「ワット・ノコーの道」は一応の完成を見た。五月に爆竹の火薬を用いて岩石が除去され、七月に道路が完全に完成した。その結果、一〇月に行われる様々な仏教行事では、新しい道ができて行きやすくなったワット・ノコー寺院が最も賑わいを見せた[15]（一八九八年五月、一二月報、九九年二月、五月、一〇月報）。その後「ワット・ノコーの道」には石が敷かれ（一九〇六年一二月報）、道幅も一八メートルに拡張された（一九〇七年一―二月報）。

一九〇七年から新しい理事官府の建設が始まり、その周囲には二本の環状の道が建設された。現在のサラー・カエト（Sala Khaet 地方役場）と、それを囲む環状路である。この「（新）理事官府の並木道」は、「ワット・ノコーの道」を介して、チューン・プレイ地方に向かう地方道路（route provinciale）二六号線に接続された（一九〇七年一―四月報）。

一九〇六年二月には、囚人と賦役を用いて、一五〇〇メートル長の「マンゴーの並木道」が建設された（一九〇六年二月報）。この道は別名を「デイ・ドス（*Day-Dos*）の道」といい（一九二一年一〇―一二月報）、港の桟橋と連絡する経路であり、「土手の道」に接続して、マレー人村を通り、華人の商業中心地とも連絡する（一九二四年一―三月報）。メコン河に沿って広がる商業地区を貫く、もう一つのメインストリートである。

このようにして一九〇〇年代中葉までに、①理事官府を中心とする官庁地区、②市場と華人のショップハウスからなる商業地区という、コムポン・チャームの町の核が成立した。これは現在まで継承されている。南郊のメコン河岸にはデイ・ドス寺院とマレー寺院（pagode malaise モスク）、西郊やや内陸にはワット・ノコー寺院[16]があり、その周辺は「現地人村（village indigène）」であった。一九〇六年当時、コムポン・チャームの町の人口は三一〇七人[17]、在住のヨーロッパ人は官吏とその関係者のみで、女性四人と子供二人を含む一五人であった。町の中心地には税関、郵便・電報局、学校[18]といった公共機関があり（L'adminis-

trateur 1907: 22-24, 105)、一九〇七年九月には医療事業が開始された[19]（一九〇七年九月報）。町の治安は、『月報』が存在する期間を通じて良好であった。強盗事件は管区の辺境地域でこそ頻繁に発生しているが[20]、コムポン・チャームの町では、一九一一年一月八日の夜間、アンナム人の放浪漁民の一団が、一二人ほどの華人と混血華人が住む家に侵入し、居住者たちを傷つけた後、宝石や身の回り品などを盗んで逃走したという一件しか報告されていない[21]。この事件では、家の主とその妻が、盗賊の顔をランプの明かりではっきりと見分けていたため、犯人は速やかに逮捕されている（一九一一年一月報）。

理事官府再開後のコムポン・チャームの町は、フランスが新たに導入した祝祭の舞台ともなった。『月報』には、一八九八年から一九一四年までの国祭日（七月一四日）の様子が報告されている[22]（一八九八年七月報、九九年七月報、一九〇〇年七月報、〇五年七月報、〇七年七月報、〇八年七月報、〇九年七月報、一〇年七月報、一一年七月報、一二年六―八月報、一四年六―九月報）。国祭日には、雨季にもかかわらず、近隣の村々から大勢の見物客が集まってきた。一八九八年の人出は一万五千人以上で、一三日と一四日の二日間にわたって、「華人の汽艇」マディナ（Madina）号がピエム・チレアン、コッ・ソタンとチ・ハエを往復し、コムポン・チャームまで乗客を運んでいる。一九〇八年の記録によれば、国祭日の催し物は、賭け事、レース、レガッタ、祝賀式、夜の上映会、花火などであった。一九一一年の記録では、四〇頭ほどの馬を集めたレースと、丸木舟のレースが特に人気を博したという。町はイルミネーションで飾られた。商人たちも、自主的に寄付を集めて祭を盛り上げた。一九〇五年には四〇〇ピアストル（piastre）、一九〇九年には二〇〇ピアストルの寄付が、国祭日実行委員会に寄せられたという記録がある。

一九〇五年以降の国祭日には、在住のヨーロッパ人、地方知事、華人の長、アンナム人の長、書記・通訳、六〇人に上る商業名士らを招いて、理事官府でレセプションを開くのが通例であった。一九〇七年以降は、一二月三一日の大晦日にも、同様のメンバーを集めて夜会が開かれている（一九〇七年一二月報、〇九年一二月報、一〇年一二月報、一一年一二月報）。これらフランス植民地行政府関係者と華人商人という二種類の人々が、二〇世紀初頭のコムポン・チャームの町を主宰していたと言ってよいであろう。

王族や大臣などプノム・ペンの貴顕の訪問も、コムポン・チャームの町に大群集を集めた[23]。シソワット王は、コムポン・チャームに三回の行幸をしている[24]。一回目は一九〇〇年八月、未だウパラーチであった時に、クロチェッからの帰路、八月四―一七日までコムポン・チャームに滞在した。この時は市場で宮廷舞踊が演じられ、見物客が殺到した。華人の食堂には人々があふれ、商人たちに相当な利益をもたらした。ウパラーチは理事官府で夕食をとったり、

自分のジャンクで夕食会を催したりした。二回目は一九〇八年九月一四―一九日である。王の一行の到着が五日遅れたため、より広範な人々が伝令を受けることができたこともあって、六千人以上がコムポン・チャームを訪れた。理事官府側は「フランスとカンボジアの色彩」で町の中心地を飾りたて、新理事官府で公式の昼食会と公開のレセプションを開いた。王は学校と現地人診療所を訪問した。さらに、二人の王子を連れて無蓋四輪馬車に乗り、騎馬の民兵たちのエスコートに、花飾りをつけた牛車五〇台を連ねて随員が続くという、華やかなワット・ノコー遺跡訪問旅行を行って沿道に大群衆を集めた。三回目は一九一〇年五月二九―三一日である。王の滞在を知ったコムポン・チャームおよび周辺の村々の住民が自発的に集まり、即興で祝賀行事が行われた。王は新旧の施設を駆け巡り、「二年前よりも町の浄化と創造が進んだこと」に満足の意を示した。

一九〇九年一二月二〇日に、理事官府で電気が使用できるようになった（一九〇九年一二月報）。一九一一年一〇月には、診療所に電気照明が入った（一九一一年一〇月報）。一九一七年末には主な道路に電気照明が設置され（一九一七年九―一二月報）、一九二一年末には町の中心地への電力供給が始まった。最初に電気が敷設されたのは、監獄、現地人衛兵査察官の家、獣医などであったが、要求があれば、フランス人・現地人を問わず、町の全住居に電気照明を置くことになっていた。そのための費用はすべて、コムポン・チャームのクム（*Khum* 行政村）[25]予算で賄われた（一九二一年一〇―一二月報）。一九二二年初頭には、理事官府学校に電気照明が入れられた（一九二二年一―三月報）。発電所は、コムポン・チャームでおそらく最初の公害事件を引き起こした。煙突の高さが不充分であったために、一九二八年に発電所近隣の住民たちが、重油の煙に対する苦情を訴えたのである（一九二八年四―六月報）[26]。

衛生状態の改善に関しては、まず一九〇八年三月に、便所の汲取り業務が開始された。華人の請負業者（*Vong-Hang*）が肥桶と特別の車を購入し、業務にあたることになった。便所の設営が義務化され、請負業者には月料金が支払われた（一九〇八年三月報）。九月一一日には、コムポン・シエム知事と華人の長を含む七人をメンバーとして、衛生委員会（commission sanitaire）が組織された（一九〇八年九月報）。一九一七年第2四半期からは、屠殺場・肉屋の肉が定期的に検査されるようになった（一九一七年三―六月報、六―九月報）。

水道は一九〇七年七月に一三メートル高の給水塔の建設が開始され[27]、翌一九〇八年九月に、理事官府および付属建造物への水道管敷設が完了した。水質については、理事官府の蛇口から採取したサンプルをサイゴン（Saigon）のパストゥール研究所（Institut-Pasteur）で検査したところ、「危険、飲用に適さず」と判定されている（一九一一年七月報）。一方現地人住民たちは、河水を汲んでいたようで

ある。一九一一年三月に現地人村で何件かのコレラが発生した際に、彼らが水を汲むための手段として、理事官府が河の中ほどまで歩道橋を設置している（一九一一年三月報）。一二月にも現地人村で六人のコレラ死者が発生し、河水の汚染を避けるために、現地人墓地を町の中心地から遠ざけることが検討された。その後一九二一年末になって、浄水場の側に飲料水用の井戸が掘られ、水道管も拡張されていく（一九一六年九―一二月報、二一年一〇―一二月報、二三年一〇―一二月報）。一九二八年中頃になると、良質の氷が恒常的に供給されていたことが報告に上っている（一九二八年四―六月報）。

四　メコン河とコムポン・チャーム

フランスは、雲南に至る経路として、メコン河航路の開拓に大きな関心を持っていた。

そのため一八六三年にカンボジアを保護国化すると、早くも一八六六年にはド・ラグレが率いる遠征隊を派遣して、プノム・ペン上流のメコン河航路探検が開始されている。以下はド・ラグレ隊の旅程を整理したものである（Garnier 1873: 159-182）。

・一八六六年七月七日正午、小型砲艦二七号でコムポン・ルオン（*Compong-Luong*）を出発した。
・翌朝早く、大量の綿を産するソタン（*Sutin*）の島々を通過し、プーム・チュローン（*Phoum Tchelong*）で小休止した。
・七月九日にクラチェッ前面に到着した。クラチェッで小型砲艦二七号をコーチシナに帰し、代わりに八隻の丸木舟[28]を調達した。
・七月一三日の正午、クラチェッを出発し、ソムボックで小休止した。
・翌朝六時に出発し、ソムボック・ソムボーの急流地帯を越えて、夕方五時にソムボー（*Sombor*）に到着した。
・七月一五日にソムボーを出発した。
・七月一九日にラオスとカンボジアの境界に達し、さらに船頭たちが「最も危険である」という、プレア・タ・ペアン（*Preattapang*）の急流地帯を越えた。
・七月二一日の朝にストゥン・トラエンに到着した。当時ストゥン・トラエンはシャムの支配下にあり、遠征隊はここで丸木舟と乗組員を帰さなければならなかった。
・八月一四日にストゥン・トラエンを出発した。
・八月一七日にコーン（*Khon*）の瀑布の下に達した。遠征隊はコーン（*Khon*）島で荷物を陸揚げし、島の北端の村に運んで、ムアン・コーン（*Muong Khong*）から派遣された丸木舟に積み換えた。
・八月二五日の正午、コーン島を出発した。
・八月二六日夕方四時半、ムアン・コーンに到着した。

これを見ると、フランスが進出を開始した当時、メコン河航路上では、(1) 政治的にはソムボー―ストゥン・トラエン間にカンボジアとシャムの境界が存在し、(2) 地理的にはクラチェッとコーン島が河区の切れ目であり、船の乗り換えが必須であったことが分かる。

一八八九年頃になると、通常はプノム・ペン―クラチェッ、増水期にはプノム・ペン―ソムボー間を、一五〇トンの小型蒸気船が毎週航行していた。一九〇〇年代半ばになると、河川郵船 (Messageries Fluviales) の二定期船、バサック (Bassac) 号とヴィエンチャン (Vien-Tian) 号が、月曜夕方四時と金曜朝一〇時にプノム・ペンを出航し、高水位期 (七―一〇月) にはクラチェッを越えて、ストゥン・トラエンとコッ・コーン島 (*Koh-Khon*) まで延長航行し、コーン島で旅客と貨物を鉄道に積み換えていた。低水位期 (一一―六月) には、クラチェッより先は丸木舟に乗り換えた。水位が余りにも低い場合 (三―四月) には、クラチェッの四五キロメートル下流にあるプーム・トメイ (*Phum-Thmey*)、チュローン地方 (*Chhlaung*) で、クラチェッから派遣された河川郵船の汽艇に乗り換えた。プノム・ペン―クラチェッの中間に位置するコムポン・チャーム港には、河川郵船の定期船の他に、毎日一〇隻ほどの「華人の汽艇」が寄港して、プノム・ペンやクラチェッと連絡していた (L'administrateur 1907: 23-24; Monographie 1908: 9)。一九二九年にクラチェッ―ソムボー間の急流地帯の岩を除去する作業が完了すると、低水位期にもヴィエンチャン型の汽艇 (三二メートル長、喫水一・五メートル) で、プノム・ペンからコーンまで直航できるようになった (Morizon 1931: 253)。この頃になると、コムポン・チャーム港と対岸のトンレ・ベート港は、「プランテーションおよび穀倉地帯の港」として、プノム・ペンに次ぐ規模の河港に数えられるようになっている[29] (*Ibid.*: 256-257)。

域内交通は、季節によって陸路と水路が交代した。七月頃よりメコン河が増水し、管区の大部分が水に沈むと、交通の主流は浸水した平原を行く丸木舟になった。「華人の汽艇」も、航行が困難なメコン河の往来を避け、水位が上昇して航行可能になった内陸のプレーク[30] (*preek*) を航行した。河沿いの「土手の道」は全体が水の下になり、メコン河と連絡するプレークに架けられた橋はすべて回収された (一九〇四年七月、八月、九月経済報、〇七年七―八月、九月経済報)。一〇月に水が引き始めると、平原の丸木舟やプレークを航行する船は徐々に減ってゆき、乾きかけた道に牛車や水牛車が姿を現した。一二月には道の全長が使用可能になり、牛車が盛んに往来するようになった (一九〇四年一〇月、一二月経済報、〇七年一―二月、一〇月、一一月、一二月経済報)。

コムポン・チャーム理事管区が域外に輸出したのは、(1) スロック・スラエ (*Srok Srae* 田のくに)、すなわち

コムポン・シエム地方、チューン・プレイ地方、カン・ミエス地方、スレイ・サントー地方の平原・低地の米、(2)スロック・チョムカー(*Srok Chamkar* 畑のくに)、すなわちメコン河やトンレ・トーチ(*Tonlé-Tauch*)の河岸の土手、プレークやブン[31](*beng*)沿い、島々で栽培される綿、タバコ[32]、トウモロコシ[33]などであった(L'administrateur 1907: 34-35)。

酒の醸造[34]、絹織物[35]・染色[36]、ゴザ[37]、タバコ、ヤシ砂糖[38]、魚の干物やプラホック[39](*prahok*)、煉瓦や瓦の製造[40]、金銀細工[41]なども行われていたが、域外への輸出は稀で、醸造業と煉瓦生産以外は大量の雇用をもたらさなかった(*Ibid.*: 65-73)。

商業活動は浸水期に停滞し、米の収穫が始まる一一月頃から急に活発になった。一二月になると、バナナ、オレンジが豊富に市場に運ばれた。大量の魚を積んだ蒸気船がプノム・ペンに下り、クラチェッ、ストゥン・トラエンの森からやってくる材木の筏も、メコン河を下っていった。「ワット・ノコーの道」、「チ・ハエ―ロヴィエ(*Lovea*)の道」、「トレイ(*Torey*)―シットー(*Sisthor*)の道」など、内陸とメコン河岸を結ぶ道では、米を満載した牛車が盛んに河の方に向かうのが見られた。農民たちは、米や野菜、果物を持って市場に行き、小間物、金物や衣類を持ち帰った。華人やマレー人の行商人たちも小間物を持って内陸に入り込み、米、皮、木などの産物と物々交換した。内陸の人々が河岸に来て、漁民から魚を買い、その場でプラホックに加工して持ち帰ることもあった(一八九九年一二月報、一九〇四年一―二月、一二月経済報、〇五年一月経済報、〇五年一二月報、〇七年一―二月、一〇月、一一月、一二月経済報)。米の取り引きは四月にはほとんど完了し、メコン河の土手に沿って集められたストックをジャンクが回収し終わると、商業活動の中心は綿に、そして五月にはタバコに移った(一九〇五年三月、四月経済報、〇七年四月、五―六月経済報)。

コムポン・チャームの港は、コムポン・シエム北部とチューン・プレイ地方の穀倉地帯からの米の出口であった(L'administrateur 1907: 24)。一九〇七年一―二月には、米を積んだ牛車が一日平均四〇〇台、コムポン・チャームの町に到着していたことが報告されている(一九〇七年一―二月経済報)。管区内の米の出口はコムポン・チャームだけではなく、下流にあるカン・ミエス地方の中心地ピエム・チカン(*Peam-Chikang*)も、チューン・プレイ地方とコムポン・シエム地方の米の出口として機能していた(L'administrateur 1907: 30)。メコン東岸では、スレイ・サントー地方のチ・ハエが、トボーン・クモム南部の米の出口となっていた(*Ibid.*: 27)。同じくスレイ・サントー地方のトレイは、シットーなどスレイ・サントー地方内陸部の米の出口として機能していた。

五　「赤土地帯」への拡大

メコン西岸では、コムポン・シエム地方とチューン・プレイ地方の北方からコムポン・トム理事管区にまたがって、プレイ・チョムカー・ルー（*Prey-Chamcar-Loeu* 上の畑の森）の台地が広がっている。二〇世紀初頭には二千人ほどのカンボジア人が住み、火を使って森を開墾し、米やトウモロコシを蒔いていた（L'administrateur 1907：37-38）。メコン東岸では、河岸から四〇キロメートルほど内陸に入ると、スロック・プレイ・ルー（*Srok-Prey-Loeuh* 上の森のくに）と呼ばれる高地に入る。この地域の住民は、ステイエン（*Stiêng*）（トボーン・クモム地方とカンチョー *Kanhchor* 地方）、プノーン（*Pnong*）（クラチェッ地方）と呼ばれる人々が主であった（Monographie 1908：6-7）。[42] 仏領期以前のスロック・プレイ・ルー地域には、未だカンボジアの王権は及んでいなかった。フランスがこの地域に支配拡大を試みるのは、一九一〇年代以降のことである。最初は一九〇九年にアンリ・メートル（Henri Maitre）が調査に入り、一九一〇年にバーン・プー・スラー（*Ban-Pou-Sra*）駐屯地（poste）を建設した（Tully 1996：149）。[43] 同じ一九一〇年には、複数のプノーンの村々が、徴税簿（les rôles d'impôt）への登録を求めることによって、服従の意を示した（一九一二年六―八月報）。彼らは「服従プノーン（*Phnongs* soumis）」と呼ばれ、カンボジア王国の行政制度の中に組織されていった。一九一二年初めには、首長の *Pa-Trang-Luong* に率いられた「不服従プノーン（*Phnongs* insoumis）」が蜂起し、駐屯地や「服従プノーン」の村々への襲撃・放火・誘拐を繰り返すようになった[44]（一九一二年三―五月報、六―八月報、九―一一月報、一二年一二月―一三年二月報、一四年六―九月報、一五年三―六月、六―九月、九―一二月報）。その後仏領期を通じて、*Pa-Trang-Luong* らがフランスに投降することはなかった[45]（Tully：154-155）。

プレイ・チョムカー・ルーと接するチューン・プレイ地方とコムポン・シエム地方の一部、スロック・プレイ・ルーやコーチシナ国境と接するトボーン・クモム地方の奥地も、人口密度が低く、住居が互いに離れて散在していることが盗賊行為を助長し、常に治安に不安がある地域であった（一九一二年三―五月報、一三年九―一一月報）。

チューン・プレイ地方、コムポン・シエム地方には、コムポン・トム管区のバライ（*Barai*）地方を拠点とする盗賊団が、頻繁に侵入してきた。一九〇八年一二月には、この地域の各村落に対し、村内を通過する余所者の挙動を報告するよう、理事官から命令が下されている（一九〇八年一二月報）。

トボーン・クモム地方でも、盗賊団が恒常的に活動しており、特に雨季米の取り引きが行われる時期には治安が悪くなるので、この地方の農民と取り引きがある華人商人た

ちが、理事官府に治安の保証を要請してきたこともあった（一九〇九年一二月報）。トボーン・クモム地方の賊たちは、主にコーチシナとの国境近くで活動しており、追跡を受けると一時解散し、後で再集結するというパターンを繰り返していた。武装は役に立たないほど古い銃か、銃に見せかけた傘の軸という貧弱なものだったが、襲撃の際には爆竹を使用して、本当に武装しているように見せかけていた（一九一四年三―六月報）。理事官府は、能吏イア・カウ（*Ea-Khau*）をトボーン・クモム知事に任じ、正規衛兵（Garde-Principal）のマルシャン（Marchand）をカンダル・チュロム（*Kandal-Chrum*）駐屯地に派遣して、治安維持にあたらせた（一九一三年九―一一月報）。その結果、トボーン・クモム地方での盗賊行為は一時的に沈静化したが（一九一四年九―一二月報）、正規衛兵と民兵が撤退すると、すぐに再発した（一九一四年一二月―一五年三月、三―六月報）。

特に一九一三―一五年にかけては、首領セーナー・ウチ（*Sêna-Ouch*）に率いられた賊の一党が、バライ地方、チューン・プレイ地方、コムポン・シエム地方、ストゥン・トラン地方、チュローン地方、トボーン・クモム地方と広域にわたって活動し、コムポン・チャームとコムポン・トムの理事官府を悩ませた[46]。

『月報』では、この地域のメー・クム（*Mekhum* 村長）や住民たちが、盗賊の撲滅に非協力的であることを繰り返し報告している。その理由は、彼らが報復を恐れており、また盗品で利益を得ていた者もいたためだと説明されている（一九一三年九―一二月報、一四年九―一二月報、一九一四年一二月―一五年三月報、一七年一二月―一八年三月報）。さらにトボーン・クモム地方奥地では、クム（行政村）自体が一九〇八年の王令（ordonnance royale）によって組織されたばかりで、未だ住民の連帯心が発達しておらず、名士たち（notables）に住民を統率するだけの権威がなかったことも、[47]村落当局が盗賊に対抗できない理由であると考えられていた。この状況を改善するためには、(1)トボーン・クモム地方を貫く地方道路を建設し、この地方をコーチシナに結びつけるか、(2)カンダル・チュロムかメモットに一人の正規衛兵を置いて監視させるしかないというのが、理事官の提言であった（一九一八年三―六月報）。

一九二〇年代に入ってから漸く、この提言が実現していくことになる。(1)メコン東岸地域とコーチシナを結ぶ植民地道路（route coloniale）、すなわち①サイゴン―クラチェッ―ストゥン・トラエンを結ぶ一三号線と、②サイゴン―タイニン（*Tayninh*）―トボーン・クモム地方―メコン河（フェリー）―コムポン・チャーム―コムポン・トム―シエム・リエプと結ぶ二二号線の建設が進み（Morizon: 235）、②「赤土地帯（terres rouges）」がヨーロッパの会社に払い下げられ、巨大なゴム・プランテーションが開かれたのである（Delvert 1961: 589）。これ以後、トボー

ン・クモム地方の盗賊団に関する報告は、『月報』に見られなくなる。

一九二七年になると、トボーン・クモム奥地のゴム・プランテーションに関する情報が、『月報』で報告されるようになる。プランテーションが開かれたメモット地区は、本来スティエンの村々が疎らに存在するだけの「無人地帯」であった。そこに千人単位のトンキン人（tonkinois）クーリーが流入した[48]。プランテーションによっては、クーリーたちの待遇が劣悪で、数百人に上る逃亡者を出していた[49]。クーリーの人数が増大するにつれて、コムポン・チャームの町の病院に収容される患者数も増え、トンキン人クーリーが患者の大半を占めるようになると、カンボジア人はあまり病院を訪れなくなった（一九二七年第1四半期報）。一九二九年第2四半期には、延べ四七八人の現地人入院患者のうち、三九六人がトンキン人クーリーであった。ベッド数が六七台しかないのに、常時一五〇―一八二人の入院患者がいたため、ひどい熱病、全身衰弱、肺結核にかかったクーリーを、病室のタイルの上、ヴェランダのタイルの上、木陰、霊安室などに寝かせ、完全には回復していない患者を退院させねばならなかった（一九二九年第2四半期報）。これと連動して、病院における死者の発生件数も増加した。一九二九年第1四半期の死亡者数は四六人で、先の四半期よりも一七人多かった（一九二九年第1四半期報）。第2四半期には、死者は八九人に達した（一九二九年第2四半期報）。

植民地道路の開通は、東岸地域に自動車事故を多発させるようになった。一九二七年七月には三件の死亡事故が発生した。うち二件はカンボジア人歩行者の不注意で、クラクションが鳴らされたにもかかわらず、車の前に飛び出してしまった。残り一件はメモットの海南人運転手の不注意で、夜間「トンレ・ベートの道」を無灯火のトラックで走っていて、一人の酔っ払ったカンボジア人を轢き逃げしてしまった。理事官府では、事故を防ぐために道路脇に多数の掲示をし、道路を渡る際には注意するよう、住民たちに呼びかけた（一九二七年四―六月報）。しかしその後も、運転手の不注意による自動車事故が数件発生している（一九二七年七―九月、一〇―一二月報）。一九二九年四月二八日には、二二号線のメモットから一・五キロメートルの地点で、トラック（P. P. 848）と旅客自動車（P. P. 3181）の衝突事故が発生した（一九二九年第2四半期報）。

同じく一九二七年には、メモットを主とするメコン東岸地域で、カオダイ教（caodaiste）の活動が盛んになり、植民地当局が警戒を強めている。五月には老人と女性子供のグループ、そして何人かの僧侶までがタイニンに巡礼したが、乾季の終わりとともに下火になった（一九二七年第2四半期報）。一一月七日―九日には、コムポン・チャーム管区から二千人の人々が、タイニン巡礼に向かった。一〇月末頃には、タン・アン（*Thanh-Ang*）トゥーダウモ

ット（*Thudaumot*）地方の小郡（canton）内、*Chêam-Thon* 村に小さな神殿が作られ、一人のアンナム人僧侶と、*Xien* という名のスヴァイ・リエン（*Soairieng*）のクォックグー（*quoc-ngu*）[50] 教師が、周辺の住民たちに布教活動を行った。トボーン・クモム地方でも、*Nguyen-van-Phung* と *Mau* という名の人物が布教活動をして、公安（Sûreté）からマークされている（一九二七年第4四半期報）。

『月報』を見る限り、一九二七年にメコン東岸地域が目に見えて活性化している。このことがコムポン・チャームの町に与えた具体的な影響としては、(1)病院の入院患者の大半をプランテーションのクーリーが占めるようになったこと、(2)コムポン・チャーム港と対岸のトンレ・ベート港が、「プランテーションおよび穀倉地帯の港」として、プノム・ペンに次ぐ規模の河港に成長したことの他に、(3)コムポン・チャームの町自体がこの時期に著しく拡大し、将来のさらなる発展が期待されるようになったことが挙げられる。

コムポン・チャームの町は日々拡大し、三年間で人口は二倍になった。人口の増大は止まない。新たな建造物が完成した上に、さらに一四件のショップハウス建設申請が、理事官府に提出されている。豊かな地区の中心地を占めるという特権的な地位ゆえに、この町は美しい未来を約束されている。人々の需要は拡大し続け、取り引きはますます増大していくことであろう。（一九二八年一〇―一二月報）

『月報』は、一九二九年半ばをもって終了する。その後のコムポン・チャームの町は、一九四二年には人口九千人、一九五〇年には一万二三〇〇人、一九五八年には二万三〇〇人と拡大し、独立後のカンボジア王国では三番目の都市となり、「王国内で最も豊かな地方の中心地」、すなわち「ゴムの大プランテーションの中心地」かつ「タバコと綿織物の中心地」であり、さらには重要な「教育の中心地」でもあるという地位を占めることとなった（Delvert 1961: 587）。

六　おわりに

本稿では、文献史料によって、コムポン・チャームの町の発生過程を再構成してきた。

現在のカンボジア王国に連続する、地方行政および国内交通路網の拠点としての地方都市の形成において、一八八四年以降にフランスが推進した理事官府の設置が最大の転機であることは明白である。特にコムポン・チャームは極端な例であり、仏領化以前に起源を持たず、発生年代は一八八〇年代にまで下る。現在の町の概観は、フランスの理事官府が主導する公共事業による都市整備と、理事官府設置後に大量流入した華人商人によるショップハウス建設に

よって形成されてきた。そして植民地行政府関係者と華人商人が、植民地期のコムポン・チャームの町における名士をなしていた。

コムポン・チャームが一八八〇年代になって初めて出現した背景には、蒸気船の導入によるメコン河水運の活性化がある。仏領化以前からメコン河航路上の要衝を占めていたのは、①クラチェッやコーン島のように船の乗り換えを要する河区の切れ目か、②ソムボック、ソムボー、ストゥン・トラエンなど、小河川がメコン河に合流する地点に立地し、内陸の森林産物を集荷してメコン河に流す機能を備えている地点であった。コムポン・チャームの町は、プノム・ペン―クラチェッ河区のほぼ中間に位置しており、この両地点を結ぶ蒸気船の中間寄港地として選ばれた。またコムポン・チャーム地方の主産物は、スロック・スラエの米とスロック・チョムカーの綿、タバコ、トウモロコシなどである。これら農産物の域外への輸出手段が充実したことによって、コムポン・チャーム地方はカンボジアにおける「穀倉地帯」という地位を得た。

コムポン・チャーム地方に関わる第二の画期は、一九二〇―三〇年の時期である。この時期に、コーチシナとメコン河岸を結ぶ陸路幹線が建設され、「赤土地帯」に巨大なゴム・プランテーションが開かれた。これによって東岸内陸地域の辺境性が払拭された一方で、自動車に慣れない現地住民の交通事故が多発し、タイニンとの交流が密接化したことによるカオダイ教の浸透、さらに本来人口が希薄な地域に大量のトンキン人クーリーが流入したことによって、新たな不安定要因が発生することとなった。

このようにして一九三〇年までに、現在のコムポン・チャームをめぐる環境が出現した。内戦による中断にもかかわらず、この環境はその根本において大きな変化を被ることもなく、現在に継続している。特に、ホーチミン市からタイ東部までを貫く陸路幹線と国際河川メコンの交点という立地は、二一世紀に入ってメコン架橋が完成したことによって強化され、コムポン・チャームの将来を大きく規定していくことになるであろう。

付記

斜字体はフランス語文書中に表れる現地語のローマ字表記を表すが、現地語表記が発見できなかったものは、正確な発音が再現できないため、カタカナ表記は割愛した。

註

(1) デルヴェールは一九五〇年の首都プノム・ペンの人口三六万三千人のうち、クメール *Khmer* 人は一五万人で、むしろマイノリティーであったという事例を示してこれを裏づける。

(2) このセンサスでは、地方（カエト Khaet/province）の中心都市（ティー・ルオム・カエト Ti Ruom Khaet/provincial headquarter town）を含む郡（スロック Srok/district）を、都市部（ティー・プロチョムチョン Ti Procumcon/urban area）として扱っている。首

都プノム・ペンについては、ドン・ペン（*Doun Penh*）、チャムカー・モン（*Chamkar Mon*）、プラムピー・メアッカラー（*Prampir Meakkakra*）、トゥオル・コーク（*Tuol Kouk*）の四地区（カンヒアンド）を都市部とし、それ以外の三特別市は、全体を都市部と扱っている（National 1999: 31（クメール語版: 41））。

(3) INDO-RSC-00367（一八九八―一九〇六年）、INDO-RSC-00368（一九〇七―一一年）、INDO-RSC-00369（一九一二―一八年）、INDO-RSC-00370（一九一九―二九年）。科学研究費補助金「メコン流域開発計画への地域研究的アプローチ」（基盤研究（B）（1））によって、二〇〇二年二月二三日―三月二五日に採集した。

(4) 英語の政府刊行物では、municipality と訳する。首都プノム・ペン（*Phnom Penh*）、特別市クロン・プレア・シハヌーク（*Krong Preah Sihanouk*）、特別市クロン・カエブ（*Krong Kaeb*）、特別市クロン・パイリン（*Krong Pailin*）。

(5) 中心地はタ・クマウ（*Ta Khmau*）で、プノム・ペン南郊に連続して位置する。

(6) 本来は譲位した王のタイトルであったが、後に王子の一人に与えられるタイトルとなった（Khin 1991: 174-175）。

(7) 王子の中から王が選び、任命する。王位継承者となることが多い（Khin 1991: 175-176）。

(8) 土地または土を意味する。

(9) 現在のスロックは、カエト（地方）の下位に位置する地方行政単位で、英語の政府刊行物では district と記される。

(10) バティエイ、チョムカー・ルー、チューン・プレイ、ドムバエ、コムポン・チャーム、コムポン・シエム、カン・ミエス、コッ・ソタン、クローチ・チマー（*Kroach Chhmar*）、メモット、オー・レアン・オウ、ポニェ・クラエク、プレイ・チョー、スレイ・サントー、ストウン・トラン、トボーン・クモム。

(11) クラエクでヴェトナムのタイニン（Tayninh）に向かう道と分岐する。

(12) スヌオルでヴェトナムのホーチミン（Ho Chi Minh）に向かう道と分岐する。

(13) 繊維をとって漁網を作るのに使う（Monographie 1913: 13）。

(14) 受益住民がランプを購入し、実際の支出から計算された月会費を徴収して、石油の購入およびメンテナンスに充てることとなった。

(15) 一八九八年一二月報には、この道路工事の「トヴー・ボン（*thvoeu bon* 積徳行）に参加したい」と言って、理事官に銀を寄付した人々があったことが記されている。

(16) ジャヤヴァルマン（Jayavarman）Ⅶ世の神殿遺構が仏教寺院に造りかえられており、一六世紀の碑文が現存している。

(17) 一九〇六年にコムポン・チャーム理事管区を構成していた地方別人口（表1）。

(18) 学校の設立は、一九〇四年初頭である。フランス人女性教師が指揮をとり、二人の現地人教師がこれを補佐した。最初、生徒は五〇人を越えなかったが、一九〇五年には八〇人以上になった。合同学舎は四本の道に囲まれた高みに位置しており、二教室と屋根付き雨天体操場、教師たちのための家々などがあった（L'administrateur 1907: 111）。

(19) フランス人医師がコムポン・チャームに着任した時点では、診療所の建物はまだ建設されていなかったが（一九〇七年九月報）、一九〇八年一月一二日に現地人救急室が落成し、二月一日より業務を開始した（一九〇八年一月報）。一九〇九年四月には診療所のベッドを六台増やし、隔離病棟用に藁小屋を建設した（一九〇九年四月報）。

(20) 第五節参照。

(21) 盗賊は縦割りにした竹に三―四センチメートル長の釘を上向きに植え込んだものを家の周囲に配置し、被害者が逃げ出せないようにしていた。

(22) さらに一九二五年からは、五月一一日にジャンヌ・ダルク祭が祝

地方名	コムポン・シエム	スレイ・サントー	チューン・プレイ	カン・ミエス	コッ・ソタン
面積（ha）	100,000	72,000	95,000	30,000	4,500
村落数	38	40	27	9	8
カンボジア人	35,845	37,860	31,512	9,029	9,712
華人	3,250	5,609	969	1,208	675
マレー人	1,918	1,752		619	347
アンナム人	335	589	82	129	
プノーン*Pnong*人	43	216			6
計	41,391	46,026	32,563	10,985	10,740

表1　1906年にコムポン・チャーム理事管区を構成していた地方別人口

われ、カンボジア人、アンナム人、ヨーロッパ人の役人・入植者たちが祭を楽しんだことが報告されている（一九二五年四―六月報、二九年四―六月報）。

(23) コムポン・チャームの町ではないが、理事長官が一九一二年初めにバット・ドムボーンへの大巡察の帰りにチューン・プレイ地方とコムポン・シエム地方を通過した際も、大勢の住民が集まってきて、「植民地首長に対する尊敬と忠誠の感情」を示した。特にコムポン・シエム地方では、最初の雨が理事長官の通過時に降ったので、農民たちはこの偶然の一致を吉兆と解釈し、理事長官の通過によって、雨が降るという幸福がもたらされたのだと噂していたという（一九一二年三―五月報）。

(24) シソワット王は公式の行幸以外に、チューン・プレイ地方のプノム・ダル（*Phnom Del*）寺院参拝を毎年の習慣としていた（一九〇五年一〇月報、〇六年一二月報、〇七年一〇月報、一〇年八月報、一一年八月、一〇月報、一二年六―八月報）。王族たちも、しばしばプノム・ダル寺院を訪れた（一九〇九年一月、三月、四月、七月報、一〇年一月、五月、七月、九月報、一二年九―一二月報）。コムポン・チャーム理事管区内では、スレイ・サントー地方のヴィヒア・スオ（*Vihea-Suor*）寺院も、王族が参拝する寺院であった（一九〇五年一二月報、〇九年七月、一〇月報、一一年八月報）。

(25) 当時のフランス語文献では、commune と訳されている。

(26) 一九二八年当時、コムポン・チャームの電気料金はキロワットあたり〇・三ドルで、他所と比較して高すぎるという不満が出ていた。また、メーターの使用料は大型メーターが月三ドル、小型メーターが一・五ドルで、顧客たちは大型メーターを小型のものに取り替えるよう要求していたという（一九二八年四―六月報）。

(27) 一九〇七年一二月報に、河岸にポンプとフィルターを設置する作業が残っているという記述があるので、水源はメコンの河水であったことが分かる。

(28) 丸木舟は一〇―一八メートル長で、周囲には、一人の人間が自由に歩きまわれる幅のデッキが取り付けられていた。このデッキは前後に突き出しており、その一方に舵が設置されていた。船体のくぼんだ部分には、竹の骨組みに筵か葉で覆った半円の屋根が被さっていた。船頭たちはカンボジア人であった。乗組員は舟の大きさによって六―一〇人で、それぞれが一方の端に鉄鉤、反対側に熊手がついた長い竹竿を持ち、この竹竿を岸の一点に固定して、デッキを前から後ろに歩くという動作を繰り返すことによって、曳船をした。このとき船頭は、舟の前方がわずかに岸の方を向いているように注意を向けていた。

(29) コムポン・チャームと同等の港として、トンレ・サープ航路の乾季の終点コムポン・チナンが挙げられている。この三港に次ぐ小港として、ストゥン・トラエン、クラチェッ、ストゥン・トランの名が挙がっている。

(30) 川、水路。

(31) 湖、沼。

(32) タバコは、コーチシナのプランテーションが発達した結果、一九〇六年の売れ行きが悪かったため、一九〇七年には多くの農民が栽培を放棄した（一九〇七年五―六月経済報）。九月には大量のタバコ（税関によると一二万五千キログラム）が「返還された土地」＝バット・ドムポーンに輸出されたが（一九〇七年一〇月経済報）、一一月には農家のストックが尽きてしまった（一九〇七年一一月経済報）。

(33) 一九〇六年にサイゴンの諸商社、特に la Société Bordelaise が大量にトウモロコシを買いつけたので、一九〇七年の栽培量は目に見えて拡大した。しかし、la Société Bordelaise はサイゴンの店を Union Commerciale Indo-Chinoise に譲ってしまったので、理事官は「新しい会社が果たして同じことをするだろうか、トウモロコシ生産者が収穫物の売れ行きについて見込み違いをしているのではないか」と懸念した（一九〇七年五―六月経済報）。その後、七月にはメコン河が異常に早く増水し、トウモロコシが植えられた河の土手が水に覆われて、かろうじて四分の一が収穫に間に合って摘みとられたが、残りは溺れて失われてしまい、現地での消費にようやく足りるくらいの収穫に終わった（一九〇七年七―八月経済報）。

(34) 醸造所はコムポン・チャームとチ・ハエにあり、両方とも広東人が所有していた。

(35) 養蚕と絹織物はメコンの島々と河岸で、女性の副業として行われていたが、フランス製の綿織物が増大するにつれて、減少の傾向を見せていた。絹糸は少量がラオスに輸出されていた。様々なデザイン・ニュアンスのサムポット（*sampot* 腰巻）が製作されていたが、現地での流通に辛うじて足りる程度で、ほとんど輸出されていなかった。

(36) 植物染料が使用されていた。

(37) 原料はヤシの葉かイグサで、チューン・プレイやスレイ・サントーの村々で生産されていた。イグサのゴザは非常に細かく、色鮮やかであった。

(38) 二月にチューン・プレイの村々で生産されていた。

(39) 生魚を塩漬けにして発酵させたもの。

(40) 窯はコムポン・チャームの町に近い河岸の土手の上に二か所あり、広東人が所有していた。その他、*Trap* 村では、アンロン・リエチ（*Anlonh-Reach*）から来た人々が、現地の粘土で土器の砂糖壺や水瓶を製作していた。

(41) コッ・ソタンでは何人かの職人が、銀で箱、小さな仏像、鳥や動物の模型などの細工物を制作していた。

(42) モン・クメール（Mon-Khmer）系の少数民族。

(43) 現在はカエト・モンドル・キリに含まれる。

(44) Tully によれば、カンボジア人民兵が彼の妻子を連れ去り、家畜を殺し、村を焼き払ったことに対する報復であった（Tully 1996: 150）。

(45) 一九一二年初め、*Pa-Trang-Luong* に率いられた *Porlam* と *Pourluong* の「不服従プノーン」が、バーン・プー・スラー駐屯地

を襲撃・放火した。続く四半期には、一九一〇年に服従の意を示した村々の住民が、四〇〇人以上も反乱に加わった。フランス側は、まずクラチェッ知事（*Kahom*）に、そしてスティエンの長（*Okmha Lu-Nhek*）に調停を任せたが、効果がなかった。一一月九日にはアンリ・メートルに一〇頭の象と二五人の現地人衛兵を付けて、バーン・プー・スラーに派遣した。二二日のバーン・プー・スラー到着後、メートルからの報告は途絶えた。一九一四年中葉になって、「不服従プノーン」による①メートルおよびスラェ・クトゥム（*Srektham*）駐屯地の長 *Balat Neang* 暗殺と、②*Ban-Pou-Khler* および *Méra* 駐屯地の完全破壊のニュースが、プノーン地区で商売を行っている現地人からもたらされた（一九一四年六―九月報）。一九一五年三月二〇日にはクム・*Knach* の *Romliech* 集落が焼かれ、九歳と四歳の二人の少女が誘拐された。三月二六日にはクム・*Chheng* の *Srê-Néang* 村が攻撃され、一四歳の *Phal* 少年と五〇歳の *Néang Om* という女性が殺された。メー・クムの *Chrnk* と息子も負傷した。四月一六日、プレーク・カムピ（*Prek Kampi*）に面した *Chhak-Trach* 村が攻撃され、「服従プノーン」の五人の住民と七五歳のカンボジア人男性が虐殺された。三人の男性と二人の女性が負傷し、一三人が奴隷として連れ去られた。四月二四日にはクム・*Khmach* の *Chawar* 村在住のカンボジア人五人が、*Kompong-Saoyou* から六キロメートルのところで攻撃された。一人の男性と一人の女性が殺され、三人が負傷し、水牛と車が奪われたが、これは後に森の中に捨てられているのが発見された。五月三日には、クム・ボス・リエウ（*Bös-Léo*）の *Dampay* 集落の三軒の家が放火され、一人の女性が殺され、一人の少年が連れ去られた。五月四日には *Autanh* 村が襲われ、二人の子供と二頭の水牛が奪われ、*Krom Chan* の家が焼かれた。五月一一日に *Don Wgéa* 集落を一団のプノーンが襲い、*Néang San* という女性と、その三人の子供を連れ去った。最後に、*Srê-Sâi* 近辺にある *Kobi* 村の *Chumtup Phong* と配下の五人が、五月二三日に一二人ほどの「反乱プノーン」に襲われたが、*Amphion* という名の賊の長を殺し、賊を敗走させることに成功した。九月一日にはチュローン地方のスヴァイ・チュレアッ *Suai-Chrêas* 村の一七軒が、五〇人のプノーンに襲われた。一九日には別の村で一六歳の *Néang Nuon* という女性が連れ去られた。クム・*Khsim* の *Phlas-Andong* 村が、同じ五〇人の一団に襲われ、二軒の家が焼かれた。プノーンが開墾地での耕作のために高原に引き上げる九―一〇月には一時事態が沈静化したが、一一月一八日に *Romiet* 村、一二月五日に *Srêprang* 村が略奪された。

(46) Tully によれば、セーナー・ウチは元僧侶で、超自然的な力に導かれていると主張しており、一〇〇人ほどいる配下の多くが体に刺青を入れ、護符を身につけていた（Tully 1996: 140）。彼の一党は、一九一三年初めにチュローン地方の *Phum-Kor* にある David 神父の家を襲撃し、神父を銃で撃って重傷を負わせた（一九一三年三―五月報）。一九一五年第2四半期になって、幹部の *Sou* がストゥン・トラン知事 *Pech* に逮捕され、共犯者 *A-Em*、*A-Khem*、*A-Angkrong*、*A-Hong* がクラチェッの *Balat Ok* と *Méklum Ek* に逮捕されたので、一党は完全に解体した。セーナー・ウチ自身は逮捕されなかったが足を負傷し、息子を殺された（一九一五年三―六月報）。

(47) トボーン・クモムの状況とは対照的に、例えばスレイ・サントー地方では、メー・クムたちが住民の助けを借りて、毎晩巡回を行っていた。ルセイ・スロック（*Rosey-Srok*）村では、三人の盗賊が *Dong-Khao-Chhun* の船を盗もうとしていたところを巡回に発見された。盗賊たちは棒やナイフで威嚇したが、住民たちは怯まず追跡し、二人を逃したものの、一人に致命傷を負わせた（一九一二年三―五月報）。

(48) カンボジアで雇われた華人クーリーは、多くの場合専門労働者であった。カンボジア人には、周辺の村々から雇われた者と、税を逃れてプランテーションを一時的な避難所にしている者がいた。彼らは下請人を通して雇われ、森を切り開く作業に使われた。コーチシナ出身

のアンナム人（annamites de Cochinchine）は数が少なく、大半はカンボジア人と同じような状況にあった。「デルタの諸地方」からやって来たトンキン人は、体格的に開拓作業の重労働に耐えることができないので、主に維持作業に使われていた。

(49) La Cie du Cambodge のプランテーションで働くトンキン人たちの宿舎は良好で、食糧は豊富で変化に富み、水も豊富であった。La Société du Syndicat de Mimot の *Phum Khchêai* キャンプには千人ほどが住んでいたが、居心地が悪く、水が不足していて、トンキン人クーリーは不満を抱いていた。監督は彼らを動物のように扱い、女性でもかまわず棍棒で殴りつけ、傷を負わせていた。調査が入って監督は罪に問われたが、クーリーたちの不幸な状況は変わらなかった。彼らは一日〇・四〇ドルで米を買わされていたが、プランテーションでは何も取れないので、米と一緒に食べるものがなかった。逃亡の咎で罰せられるので、プランテーションを離れることもできなかった。彼らは朝四時半から夕方六時まで働き、米とニョクマム *nuoc-mam* を食べ、脚気（béribéri）に罹っていた。

(50) ローマ字表記したヴェトナム語。

参照文献

L'administrateur-résident (1907) *Monographie de la circonscription résidentielle de Kompong-Chan*, Saigon, Imprimerie F-H Schneider.

Aymonier, Etienne (1900) *Le Cambodge*, Vol. 1. Paris, Ernest Leroux.

Bonnaud, A. (1881) "Rapport sur un voyage de reconaissance dans le haut-Me-kong," *Excursion et reconaissance*, 3: 445-454.

Campion, P. (1884) "Voyage de l'aviso《L'Alouette》de Pnom-Penh à Sambor," *Excursion et reconaissance*, 7: 505-513.

Delvert, Jean (1961) *Le paysan cambodgien*, Paris, Mouton.

Garnier, Francis (1873) *Voyage d'exploration en Indo-Chine effectué pendant les Annéés 1866, 1867 et 1868 par une commission francaise présidée par M. le capitaine de frégate Doudart de Lagrée*, Paris, Librairie Hachette.

INDO-RSC-00367 (1898-1906) *Rapports périodiques, économiques et politiques de la résidence de Kompong-Cham*. (C. A. O. M./Aix-en-Provence)

INDO-RSC-00368 (1907-1911) *Rapports périodiques, économiques et politiques de la résidence de Kompong-Cham*. (C. A. O. M./Aix-en-Provence)

INDO-RSC-00369 (1912-1918) *Rapports périodiques, économiques et politiques de la résidence de Kompong-Cham*. (C. A. O. M./Aix-en-Provence)

INDO-RSC-00370 (1919-1929) *Rapports périodiques, économiques et politiques de la résidence de Kompong-Cham*. (C. A. O. M./Aix-en-Provence)

Khin Sok (1991) *Le Cambodge entre le Siam et le Viêtnam (de 1775 à 1860)*, Paris. EFEO.

Leclère, Adhémard (1894) *Recherches sur le droit public des cambodgiens*, Paris, Augustin Challamel.

Monographie de la province de Kratiĕ (1908). Saigon. Imprimerie F. H. Schneider.

Monographie de la province de Stung-Treng (1913) Saigon, Imprimerie commerciale C, Ardin.

Morizon, René (1931) *Monographie du Cambodge*, Hanoi, Imprimerie d'Extrême-Orient.

National Institute of Statistics, Ministry of Planning (1999) *General Population Census of Cambodia 1998 Final Census Results*, Phnom Penh.

"Organisation du Cambodge" (1885) *Excursions & Reconaissance*, 8: 205-252.

Pavie, Auguste. (1884) *Excursion dans le Cambodge et le royaume de Siam*, Saigon, Imprimerie du Gouvernement.

Tully, John (1996) *Cambodia Under the Tricolour : King Sisowath and the 'Mission Civilisatrice' 1904-1927*, Monash Papers on Southeast Asia No. 37. Clayton.

（きたがわたかこ／東京大学非常勤講師）

『地域研究』編集委員会

編集長
臼杵　陽　国立民族学博物館　地域研究企画交流センター
編集委員
飯塚　正人　東京外国語大学　アジア・アフリカ言語文化研究所
栗本　英世　大阪大学大学院　人間科学研究科
田辺　明生　京都大学大学院　アジア・アフリカ地域研究研究科
速水　洋子　京都大学　東南アジア研究所
藤原　帰一　東京大学大学院　法学政治学研究科
村田雄二郎　東京大学大学院　総合文化研究科
小長谷有紀　国立民族学博物館　研究戦略センター
押川　文子　国立民族学博物館　地域研究企画交流センター
阿部　健一　国立民族学博物館　地域研究企画交流センター

『地域研究』寄稿の御案内

『地域研究』は、地域研究に携わる研究者はもとより、隣接分野・異分野の領域に関わる方々などに広く開かれた雑誌として、年2回刊行しています。本誌は、地域から世界を、また世界から地域を見つめる論考を募集しています。分野・地域は問いませんが、初出論文に限ります。寄稿要項の詳細は、地域研究企画交流センターのホームページに掲載しております（**http://www.minpaku.ac.jp/jcas/points/**）ので、ご覧ください。「地域研究編集事務局」（**jcasrvw@idc.minpaku.ac.jp**）宛てにメールにてご相談いただいても結構です。

『地域研究』Vol. 6 No. 1

初版発行　2004年4月30日
編集・発行　国立民族学博物館
地域研究企画交流センター　JCAS
〒565-8511　大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話　06-6878-8343　FAX　06-6878-8353
E-mail: jcasmail@idc.minpaku.ac.jp
URL(JCAS Web) http://www.minpaku.ac.jp/jcas/
制　作　株式会社　平凡社
〒112-0001　東京都文京区白山2-29-4
電話　03-3818-0873(代表)　03-3818-0874(営業)

ISSN 1343-1897

国立民族学博物館 地域研究企画交流センター
©2004 by the Japan Center for Area Studies.
Published by the Japan Center for Area Studies,
National Museum of Ethnology, Osaka, 565-8511 JAPAN
Printed by Heibonsha.